

佳作

## 花の色

東京都 東京都立桜町高等学校二年 石川 蘭

白い花が桃色に染まる。

中学三年生の春、花びらが美しく波打つのを窓から眺めていると、世界から置いていかれていることに気付いた。小さい頃から、集団で行動することが苦手で、喜びや悲しみを分かち合うことをしたことがない。習い事でフラダンスを習っているが、笑顔を作ることに精一杯である。人並に話が出来るように、話すことを決めてから、登校しているときも、あった。「目が覚めたら明日が来てしまう」と思うと怖くて眠れなかった。周りの明るい心が重く感じて苦しかった。人の笑う声を聞くと、花が枯れてしまいそうだった。

しかし、苦しい日々から前を向くきっかけになることがあった。部屋の窓から見ると、向かいに見える木が、好きだった。花びらが優雅に揺れて、鳥は果実を食べに訪れるどこか羨ましく、魅力的な木である。

風の強い日、緑色の鳥が木に訪れた。美しい姿に見られて外に出ると、杖をついたおばあちゃんが、木を眺めていた。

にとって、誰かの幸せを願う表現は難しい。分からないからこそ考えると、自分なりの「幸せ」の花を咲かせたいと思った。眩しく照らす明かりが体を包み込んだ。人の心が、虹のように混ざり合い、私の心に温かく灯る。「幸せ」を願い、舞台が終演した。

「亡くなった妻にもう一度会えたような幸せが心にあります。」

ハンカチを持ったおじいさんが、目の前に現れた。おじいさんの妻に思う愛が、私の花を桃色に染めた。人に感謝されることは初めてで、今までにないぐらい嬉しかった。私は「幸せを伝えるために、生きているのだ」と改めて思った。

高校生になり、毎日学校に登校出来るようになった。手の震えが止まらない日もあるが、今までに出会った人から送られた思いのおかげで、自分に負けずに足を動かした。また、フラダンスのインストラクターを任されるほど実力を上げることが出来た。人に「幸せ」を届けるためには、自分の「幸せ」を追求する必要がある。私にとっての「幸せ」は、必ず人が映っており、今まで出会った、数えきれない感謝を持った人がいる。その人達は、全員笑顔で、心の花に水を与えてくれる。一人では枯れてしまう思いも、誰かと一緒なら乗り越えられた。だからこそ、私の「幸せ」をこれからも感じ、育てる。

私は、伝えたい。前を向くことを恐れないで。貴方の前には、優しく笑う人がいるだろう。その人を、羨まし

「素敵な鳥さんよね。」

学校について何も触れず、話しかけてくれた。

「鳥も私を置いていってしまうのかな。」

自分でも、おかしなことを言っていることは分かっているが、ふと呟いてしまった。

「焦らなくていいのよ。」

おばあちゃんの優しい声に、心の中に溜めていたものが、溢れ出すように涙が頬を濡らした。その涙は、心の花を咲かせる。私は、自分のペースで、学校に行くことを決めた。

四ヶ月ぶりの学校は、やはり怖くて教室までの距離が、何倍にも長く感じた。教室に向かう途中に国語の先生に会った。先生は、心配そうに教室に送ってくれた。一人で教室に行けないと思われているのだと思うと罪悪感を抱いた。最初は、教室に入るとクラスメイトの目が怖くて前を向けなかったが、段々前を向いて授業を受けることができた。自分が怖いと錯覚していただけで、自分のことを気にしていないことを知り、安心した。

私は、学校に行けない日はフラダンスの練習に励んだ。今までは、周りより劣っていることが恥ずかしくて、自信を持って踊れなかったが、徐々に自分の笑顔を作れるようになった。「憧れ」の先輩に出会い、「憧れ」と言ってくれる後輩に出会った。

ある舞台で、『ハナミズキ』という曲を踊った。この曲は、一青窈の代表曲である。人を愛したことの無い私

く思い、寂しく思うことがある。しかし、それは悪いことではない。自信を持ってないときがあることは当たり前で、世界に置いていかれているのは一人ではない。

これまで生きてきた経験が、一番の味方であり、未来を照らしてくれる。悔しい感情があるから、乗り越えた先が作られ、嬉しい感情があるから、人と分かち合える。私は、人の優しさや感謝を忘れることはない。心を無理に覗いてくる人がいるかもしれない。壊れそうな心をさらに砕いてくる人がいるかもしれない。

けれども、少し前を向くことができれば、貴方に手を差し伸べてくれる人が現れる。嫌なことを分かち合ってくれる人が、必ず現れる。

心の花を染めよう。

貴方の花は羨ましいぐらいに美しく咲いているのだから。